

今日の説教のポイント<マタイによる福音書6章22-24節>

①生きて行くのに不安に駆られるのは、見つめて歩む方向が定まっていないから。よそ見せず、しっかり神様を見つめて歩み行こう！

「体のともし火は目である。目が澄んでいれば、あなたの全身が明るい、濁っていれば全身が暗い」。「澄む」と訳された元のギリシア語は「単一の、単純な」という意味を持っています。続く24節では、「だれも、二人の主人に仕えることはできない」ということが言われていますから、私たちが、あれにもこれにも目をやるのではなく、「単純に、一つのもの」、すなわち、神様をしっかりと見つめて生きることが大事だということを考えさせられます。

9月末、関西に行った折、関ヶ原の戦いの資料館に行きました。心に残ったことは、豊臣側でありながら徳川側の誘いを受けて寝返った武将たちが、その後、徳川家康から冷たくあしらわれたことでした。家康の仕打ちに寒気を覚えます。また、どちらにつくか最後まで迷い続けた武将たちが、後に後悔の念にさいなまれたであろうことを思いました。私たちが救うために自らを犠牲として下さったイエス様、そして、そのイエス様によって私たちへの愛をお示し下さった神様。家康との違いを思います。よそ見せず、ただこの神様を単純に見つめ、主が示して下さる道を行こうではありませんか。地上の歩みがどうであろうとも、その最後に、約束の神の国が用意されているのですから。

②私たちが虜にする最たる偶像神は富。富んでいる者も、貧しい者も、この偶像神に囚われてしまわないように、注意、注意。

イエス様は、「あなたがたは、神と富とに仕えることはできない」と教えられました。ここで「富」と訳した言葉はギリシア語ではなく、イエス様が語られたアラム語「マモン」がそのまま使われています。この福音書を記したマタイは、あたかも富を「マモン神」という、私たちの心を支配してしまう偶像神であるかのように考えているのです。今や、富、経済といったら、人々が普通に使っているなんの心配もない社会用語のように思います。しかし、注意、注意。私たちが、いつの間にか、神様よりお金のことを考える時間の方が多くなっていたら、サタンはほくそ笑んでいるのです、「してやったり、経済の奴隷になったぞ」と。